

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730621

研究課題名(和文) 大学生の「分かったつもり」を解消する支援：学校インターンシップを中心に

研究課題名(英文) The effect of school internships on the integration of concepts and practices

研究代表者

田島 充士 (TAJIMA, Atsushi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：30515630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：学校インターンシップへの参加を通じた学生の成長を検証した本研究では、学生が大学で学ぶ知識(「学問知」と呼ぶ)を、社会実践の現場で蓄積される知識(「実践知」と呼ぶ)と関連づけることで、社会実践と結びついた独自の解釈を行える能力育成のための教育実践のあり方について検証を行った。分析の結果、インターンシップ経験には、両知見を生産的に結びつける「共創的越境」と呼ぶ交流に参加する能力を促進する効果があると認められた。さらに、この共創的越境を学生が持続的に実現し得る能力を育成するための、大学における教育プログラムの開発・実施も行った。

研究成果の概要(英文)： This study investigated the effects of internships on students' ability to integrate academic concepts learned in universities with practical applications, focusing especially on so-called "school internships" that allow students in teacher-training courses to teach elementary school pupils and junior high school students. The results showed that students who participated in internships were able to connect the concrete practical knowledge acquired during internships with academic ideas, and that this integration produced original understandings of psychological and pedagogical concepts. I called this process "co-creative boundary crossing", and developed effective educational programs to promote the ability of university students to continuously engage in it.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学習過程 インターンシップ 分かったつもり 教員養成 大学教育

## 1. 研究開始当初の背景

就労現場の分業化・国際化が進む昨今、異なる活動文脈を背景とする人々に対し、自分の知る専門知識を的確に伝え、彼らの疑問に答えることができる等の知的な異文脈間交流への参加を可能とする能力の重要性が高まっている。そして多くの労働者を輩出する大学教育には、この種の能力の育成が、これまで以上に求められてきている。

しかしこのような知的交流を実現することは、現状では、学生にとって困難ともされる(Korthagen, 2001; 田島, 2009)。そのことは、大学で学ぶ知識(以下「学問知」と呼ぶ)と、学外の社会実践の現場で経験的に蓄積される知識(以下「実践知」と呼ぶ)が多く、学生の学びにおいて断絶する傾向にも現れている。また田島は、多くの学生が自分の知る知識を、異なる活動文脈を背景とする他者に対し論理的に説明することができない傾向にあるという現象を捉え、これを「分かったつもり」と呼んだ。

この問題を解消する上で、学生が学外の社会実践の現場に赴く「インターンシップ」は有効な教育支援プログラムになると考えられる(田島, 2014)。この種の研修への参加を通し学生達は、自分の知識を媒介として、異なる活動文脈を背景とする他者と交流を行う経験を経ることができる。またそれだけではなく、その経験を活かし、さらに大学における学習をみつめなおすことができる。以上の活動を通し、学生達の学問知学習は大学文脈に閉じた、いわば分かったつもりの状態にとどまることなく、広く社会実践にひらかれたものになることが期待されるのである。特に教員をめざす学生が小中高校に赴くインターンシップ(以下「学校インターンシップ」と呼ぶ)は、大学教育との整合性の高い研修として評価されている。そのため、本研究では学校インターンシップに分析の焦点を合わせた。

一方で、学校インターンシップ実践の効果を検証した従来の研究には、異なる活動文脈を背景とする他者との相互交流能力を軸とした参加学生の成長に関して直接的な検証を行ったものはない。さらに、研修の効果をフォローアップするための大学教育そのものの検証を行う動きも緩慢であり、本研究で着目する、学生達の異文脈間交流の能力を促進するための、大学内における学問知教育の方法に関する具体的な検証研究もない。

以上にあげた研究テーマに取り組むことは、冒頭にあげた社会的要請に応え得る大学教育のあり方について、具体的な実践モデルをとまなう提言を行うことができるという点で意義があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、上述の問題意識に基づき、学

校インターンシップを軸とした教育実践を主な分析対象とし、学生が自分の知る知識を介して、異なる活動文脈を背景とする他者との生産的な交流に参加できる能力の促進を支援し得る教育支援のあり方を探ることを目的とする。具体的には、以下の三つの観点から検証を行う。

第一に、学校インターンシップへの参加を通じた学生の成長モデルを構築するための理論研究を行う。高等教育に関する従来の理論研究をレビューした上で、学生の成長像に関するモデル概念を提案する。

第二に、学校インターンシップへの参加を通じた学生の成長について実証的に検証する。研修現場において児童・生徒達へ自身の知識を教授する言語活動に焦点を合わせ、研修への参加を通じた学生の成長過程を明らかにする。

第三に、以上の検証作業を通して明らかとなった学生の成長を、大学内においても促進し得る授業のあり方を探る。学生の実践知を活かした学問知の教育方法について、実験的な授業プログラムを開発・実施することで検証する。

## 3. 研究の方法

本研究では、目的において述べた観点を背景として、以下の研究プロジェクトを企画し、検証を行う。

### (1) 学生の成長モデルの提案(理論研究)

教育実践分析において多く引用されるヴィゴツキー、L.S.の教育論およびバフチン、M.M.の対話論、フレイレ、P.の批判的リテラシー論を中心に参照する。さらに社会実践現場における有用な思考スタイルをモデル化した「実践/行為の中の省察論(Schön, 1983)」および「リアリスティック・アプローチ論(Korthagen, 2001)」、「活動システム論(Engeström, 2001)」の理論的知見も参照し、本研究における学生の成長像を概念化する。

### (2) 研修参加学生の成長過程の検証

学校インターンシップの研修に参加する学生を対象にした以下の検証を行う。

#### フィールドワーク調査

学校インターンシップへの参加学生を調査協力者とした、研修中の言語活動をビデオカメラ・フィールドノートにより記録したフィールドワークデータの分析を行う。研修内容は、公立中学校の補習授業における数学の個別指導である。本調査の調査協力者にはインターンシップ未経験者と経験者を含み、研修開始時期における両者の言語活動の違いおよび、研修への参加を通じた両者の時系列的变化を比較し、学校インターンシップの教育効果を検証する。

さらに研修先の中学校と共同で、インターン学生の活動を活かした教育実践プログラ

ムも企画・実施し、その効果を検証する。

#### インタビュー調査

学校インターンシップに参加した学生を対象に、研修への参加を通じた自身の成長について聞き取るインタビュー調査を実施する。のフィールドワーク時に、参加学生を調査協力者として研修実施前後に聞き取り調査を行ったデータ、フィールドワークが完了して1年後、同じ調査協力者を対象に研修参加のその後の効果について聞き取るデータを主要な分析対象とする。さらに、研修先の学校関係者(学校長・研修担当教員・生徒)を対象に、学生の変化について聞き取る補足調査も実施する。

#### 質問紙調査

学校インターンシップの参加経験者および未経験者を対象に、研修の効果を検討する質問紙調査を行う。本調査では、インターンシップの学習効果を検討するため、調査協力者に対し、生徒指導上の問題を抱える支援困難な児童・生徒への介入について、異なる見解をもつ関係者との協議を行うことを想定したレポート課題に回答するよう求める。異なる活動文脈を背景とし、連携困難な当事者との交渉という異文脈間交流の参加可能性をいかに調査協力者が見出すのかを検証するのが目的であり、参加経験者と未経験者との間の反応の違いを統計的に検証することで、インターンシップの学習効果を客観的に分析できると考える。

### (3) 大学における教育実践の改革検証

学校インターンシップを対象に実施した本研究の知見をもとに、学外で学生が得る実践知の観点を活かした、大学における学問知の教育方法の開発を行う。

#### 予備調査

教職課程の履修学生を対象に、予備的な質問紙調査を実施する。

#### 授業プログラム開発および実施

これまでに得られた研究知見をもとに、20名程度の履修者を想定した授業プログラムを開発する。また調査者が担当する授業において、このプログラムにもとづいた実践を実施し、その効果を検証する。授業活動はビデオカメラにより記録し、分析に使用する。

## 4. 研究成果

本項では、方法において述べた研究プロジェクトごとに、成果についてまとめる。

### (1) 学生の成長モデルの提案(理論研究)

学校インターンシップへの参加を通じた学生の成長像に関するモデル概念の創出を行うため、インターンシップ実践の諸問題に関連する理論的・実証的な先行研究のレビューを行った。その結果、異なる活動文脈を背景とする他者との異文脈間交流(Engeström(2001)にならい「越境」と呼ぶ)

の、共同作業の生産性の観点からみた質の違いを明らかにすることが重要であるとの結論に達し、その違いを、聞き手の視点に対する話し手の態度(相手の視点を尊重する程度)の違いから分類・モデル化した。そしてこの観点から、本研究における学生の成長を捉えることにした。

以上の越境の質は、a.自分の意見と他者の意見を接続することに関心を払わない交流(以下「無相関的越境」と呼ぶ)、b.自分の意見に固執し、他者の意見を無効化しようとする交流(以下「包摂的越境」と呼ぶ)、c.自分と他者の両観点を活かし、新たな見解の創出に努めようとする交流(以下「共創的越境」と呼ぶ)にモデル化できた。そして先行研究のレビューより、生産性が高もつとも高いのは、共創的越境になると結論づけた。

その上で、学校インターンシップへの参加を通じた学生の成長を、他者との交流が無相関的ないし包摂的越境から共創的越境になることとして捉えた。また冒頭で紹介した分かったつもりとは、学生らが越境に際し、無相関的ないし包摂的水準にとどまっていることを示す現象として解釈した。

さらにヴィゴツキーの教育理論を参照し、大学で学ぶ学問知のメリットとして、複数の具体事例・経験を抽象化・体系化して整理できることと捉えた。つまり学問知には、様々な実践文脈で個々に蓄積される複数の実践知を総括し、相互の比較検証を可能とする機能が認められるということである。したがって学生がこの学問知を実践知と関連づけるということは、単に、大学文脈と学外の実践現場を知的に往復するにとどまらず、彼らが個々別々の活動文脈において得た実践知を比較検証することを通じ、異文脈を背景とする者同士との生産的な交流(共創的越境)を促進する可能性を高めるのである。

### (2) 研修参加学生の成長過程の検証

#### フィールドワーク調査

研究協力校である中学校に派遣された2名の学生を対象としたフィールドワークデータを分析した結果、研修初日においては、インターンシップ経験者と比較して未経験者は、生徒達の学習文脈を十分に考慮した教材説明を行うことができず、自分が知る情報の一方的な提示を行う(無相関的・包摂的越境)傾向にあることが分かった。しかし研修最終日においては、経験者・未経験者ともに、生徒達の学習文脈を考慮した教授活動(共創的越境)を行えるようになった。この傾向は、学生-生徒間の交流事例の分析だけではなく、彼らが生徒に対して行った教授言語を分類・集計したデータを対象とした統計分析によっても確認された。

また以上の特徴は、概ね、研修先の中学校と共同でインターン学生の活動を活かした教育プログラム実践においても確認された。さらに、この学生の成長は研修先の生徒達に

も影響を与え、学生の教授言語をモデルとし、生徒間の話し合いにおいて、相手に伝わる言語を探るようになったことが、生徒間の交流事例や該当の生徒に対するインタビューから明らかになった。

以上の分析から、学生らは学校インターンシップへの参加を通し、生徒との交流を、無相関的ないし包摂的越境から共創的越境へと変化させたことが明らかになった。さらに学生らの越境に対する共創的態度は、研修校の生徒達にも伝播した可能性が示唆された。

#### インタビュー調査

のフィールドワークの協力者に対し実施したインタビュー調査では、インターンシップ経験者・未経験者ともに、研修中の生徒との越境に際し、生徒達が十分に理解できると思われる説明を行うために、彼らの学習文脈を予想し、事例やたとえを活用するよう配慮していたと報告した。ただし未経験者にとって、研修当初は生徒達の学習文脈を尊重することは困難であり、上記のような配慮をとまなう越境ができるようになるには時間が必要であったことも分かった。また経験者は研修が進むに従い、生徒達自身の考察を深めるためにあえて説明しないなど、生徒達との相互交流のなかで自らの教授言語を調節するようになったことを報告した。

さらに以上の越境に際し、経験者・未経験者ともに、大学において学んだ学問知の観点が役立ったとする報告を行った。生徒指導論・教育心理学等の理論を意識し、抽象的(メタ的)視点から、関連する学術的データと現在の実践行為を比較することで、自身の行動をモニターするのに役立てたということである。また生徒達との交流経験から得られた実践知の価値を客観的に評価できるものとして、新たな学問知学習への動機づけを高め、大学において、自主的な実践研究を進めていたことも報告もされた。

インターンシップ受入校の学校長・担当教員へのインタビューからも、学生らの越境にみられる共創的傾向が確認された。さらに、学生らの活動に刺激され、現職の教員の中に、教授活動をより生徒達の文脈を考慮したものにへ変化した者がいたことも報告された。

以上の分析から、学生らの越境に向かう態度を共創的にしていく学校インターンシップの効果が確認できた。さらにこの共創性は、研修校の教員にも伝播した可能性が示唆された。そして学問知の観点がこの成長を支えていた可能性、また研修中に得た実践知を越境的に評価する視点として、学問知学習の意義づけがなされた可能性も示唆された。

#### 質問紙調査

本調査で使用する質問紙の主要箇所は、不登校児童・生徒の事例提示を行った上で、a.この児童・生徒に対する支援の見立てを選択するページ、b.この選択肢とは異なる意見を持つ関係者の意見を提示し、この関係者に対し自説の正当性を説明する小レポートを執

筆するページから構成された。学校インターンシップの参加経験者 27 名・未経験者 13 名を調査協力者として実施した。統計分析の結果、経験者は未経験者と比較し、自説を一方的に主張するのではなく、相手の主張の妥当な要素を認めつつ、相互の立場からみて納得できる解決策を模索する(共創的越境の特徴)傾向がみられることが明らかになった。調査協力者らが実践現場で出会う様々な人々の生産的な意見交渉を可能とする力を、インターンシップへの参加を通して身につけつつあることを示すデータとして解釈した。

### (3) 大学における教育実践の改革検証

#### 予備調査

教職課程設置の講義(履修者 55 名)において、講義で学んだ学問知の観点から、学校現場においてみられる生徒指導上の問題の解決を試みるよう求めるレポートを設定した。分析の結果、具体的な問題解決の方法に関する記述にとどまる者、もしくは抽象的な学問知の記述にとどまる者が多くみられることが分かった。学校インターンシップへの参加を通して達成されると考えられる、学問知と実践知の相互参照を通じた共創的越境力の獲得を学内において支援することは、従来型の講義を行う限り、限界があることが示唆された。

#### 授業プログラム開発および実施

予備調査の結果を受け、またアクティブラーニング(溝上, 2007)の実践事例を参考に、学生の共創的越境力育成を目指した授業プログラムを開発した。そして10月~2月にかけて、研究代表者が担当する心理学講義(履修者 14 名)において実施した。本授業では、特定の教育心理学的テーマについて、受講生自身が指定図書を読まざるに調査を進め、他の受講者にその成果を解説する活動を設定した。

この活動では、課題となる学問知の情報について単にまとめるだけではなく、テーマに関連し、具体的な社会問題について調査し、学問知の観点から解釈する「事例分析」を行うよう指示した。すなわち、学生が学外で実際に見聞・経験する中で得た実践知と、課題となる学問知との接続を行うよう求めたのである。また発表者以外の履修者には、発表内容を注意深く傾聴し、授業文脈とは異なる活動文脈を背景とする他者の立場から質問を行うよう求めた。すなわち、教室内において越境的交流が導入されるよう働きかけたのである。本実践ではこの質疑応答を重視し、授業開始時期には、実際に授業者が質問モデルを履修者に対して提示する指導も行った。

授業開始当初は、発表内容における事例研究の分析が不十分なものが多く観察された。また聞き手からの質問に対する応答も、質問の意図を十分に読み取ることができず、一方的な説明に終始するか、回答を回避する傾向がみられた。さらにその質疑応答の内容も、

実践的・具体的な内容、もしくは抽象的な内容に偏り、学問知と実践知が接続されない傾向にあった。

しかし発表を重ねるごとに、発表者による事例研究は、聞き手が重視する実践知の観点を十分に取り入れた学問知解釈へと発展した。またそれに従い、発表者と聞き手との間の質疑応答も十分に相互の意図をくみ、新たな見解を創出できるものになっていった。さらにその質疑応答の内容も、学問知を介して複数の実践知を相互比較するものへと変化していった。すなわち本授業への参加を通し、履修者らの越境に向かう態度は、無相關的ないし包摂的なものから、共創的なものへと変化した。

さらに以上の交流を促進する上で、カウンセリング実践の中で開発された傾聴技術を教員が身につけ、学生達に働きかけることが、持続的な共創的越境を可能とする雰囲気構築する上で有効であることも確認できた。

以上の分析より、大学内で実施する授業においても、学生達が参与する複数の活動文脈における実践知を統合し、学問知を介した共創的越境を促進することは可能であることが示された。本授業の方法は、学問知のメリットを活かし、異文脈間交流への参加能力を促進する学校インターンシップの研修効果を、より強力にフォローアップ教育として活用可能なものと考えている。

今後は、より多くの履修者を対象とした講義においても、同様の効果を促進できる教育方法の開発を進めていく必要があると考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

田島充土 (2014) 異質さと向き合うためのダイアログ：バフチン論からのメッセージ(特集『対話』) 心理学ワールド、64、9-12。(査読無し)

田島充土 (2013) 異質さと共創するための大学教育：ヴィゴツキーの言語論から越境の意義を考える 京都大学高等教育研究、19、73-86。(査読無し)

田島充土 (2013) 質的研究概念としての「分かったつもり」(質的心理学会10周年記念号)質的心理学会フォーラム、5、83-84。(査読有り)

Atsushi Tajima (2013) Boundary crossing in the light of Vygotsky and Jakubinskij: Thinking about development in school internships. 国際ヴィゴツキー学会発表論文集、14、252-256。(査読有り)

中村直人・田島充土・入野博・山本冬彦・佐藤仁 (2012) 学校インターンシップの未来を問う：理論知と実践知を結ぶ 高知

工科大学紀要、9、151-164。(査読無し)

[学会発表](計13件)

田島充土 分かったつもりから共創的越境へ：子どもたちの学びを引き上げる教師のパワー 2014.2.22. 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会招待講演、大阪教育大学附属天王寺小学校

田島充土 異質な他者との共創を目指す：ヴィゴツキー論からみた「分かったつもり」の意味 2014.1.31. 山口大学大学院教育学研究科招待講演、山口大学

田島充土 カウンセリング論からみた学習指導のありかたとは 自主企画シンポジウム『学習指導研究と臨床支援研究間の交流可能性をさぐる(企画：田島充土・沖林洋平)』 2013.8.19. 日本教育心理学会第55回総会、法政大学

田島充土・森下覚・麻生良太・藤田敦 インターンシップを通して学生は何を学ぶのか：異質な他者との多声的関係をひらく対話 2013.8.19. 日本教育心理学会第55回総会、法政大学

田島充土 アクティブラーニングにおける公共圏他者を「共創的越境」から読み解く 2013.3.14. 大学教育研究フォーラム、京都大学

田島充土 越境経験を通じた参加学生の対話力とは：「越境の知」の育成と「共創的越境」の実現を目指して 自主企画シンポジウム『学校インターンシップの可能性を問う：「越境の知」をはぐくむ(企画：田島充土・中村直人)』 2012.11.24. 日本教育心理学会第54回総会、琉球大学

田島充土 臨床支援としてのリボイシング：自律的探求者の育成を目指して 自主企画シンポジウム『協調的な学びを促すリボイシング(企画：一柳智紀・白水始)』 2012.11.24. 日本教育心理学会第54回総会、琉球大学

田島充土 自由なダイアログの可能性を求めて：ヴィゴツキーおよびバフチン論におけるモノログ概念の展開 2012.11.3. ヴィゴツキー学第14回大会、神戸市勤労会館

田島充土 大栃中学校との連携を通しての学び：学校インターンシップを活用した言語力の育成 2012.8.10. 高知県香美市教育委員会教職員研修会、高知県香美市教育委員会

田島充土 大学生における学びの創発性：学校インターンシップを視点としてシンポジウム『模倣と創発としての学習：ヴィゴツキーおよびフレイレのまなざしより(企画：岡花祈一郎・田島充土)』 2011.11.27. 日本質的心理学会第8回大会、安田女子大学

Atsushi Tajima "Understanding" as Recontextualization: Connecting Semiotics of Vygotsky and Jakubinskij.

2011.9.7. International Society for Cultural and Activity Research, University of Rome.

Atsushi Tajima Raising consciousness of learners beyond the boundaries of “partial understanding” : Establishing “re-contextualization” through school internship. 2011.7.28. ISCAR- Asia and SIG DEE Workshop 2011 “The Front of Activity and Situation Researches” , Taisho University.

田島充土・中村直人 学校インターンシップへの参加を通じた教職課程履修学生の成長：ヴィゴツキーの「自覚性と随意性」を軸に 2011.7.24. 日本教育心理学会第53回総会、北翔大学

〔図書〕(計4件)

田島充土 (2014) 大学における説明の教育とは：「越境の説明」の提案 富田英司・田島充土 (編著)『大学教育：越境の説明をはぐくむ心理学』pp.3-16. ナカニシヤ出版

田島充土 (2014) インターンシップ：フレイレの教師論からみた越境の説明 富田英司・田島充土 (編著)『大学教育：越境の説明をはぐくむ心理学』pp.145-163. ナカニシヤ出版

田島充土 (2014) 「越境の説明」再検証：大学教育の未来へ富田英司・田島充土 (編著)『大学教育：越境の説明をはぐくむ心理学』pp.245-253. ナカニシヤ出版

田島充土 (2011) 発達の最近接領域とことばの理解 茂呂雄二・田島充土・城間祥子 (編著)『社会と文化の心理学 - ヴィゴツキーに学ぶ』pp.74-90. 世界思想社

〔その他〕

ホームページ等

田島充土 (2014) ヴィゴツキーの人格・意味・意義概念からみた学びの姿：第14回国際ヴィゴツキー記念研究集会参加レポート ヴィゴツキー学協会 web ページ (<http://vygotsky.blog.fc2.com/blog-date-201401.html>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田島 充土 (TAJIMA Atsushi)  
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授  
研究者番号：30515630